

コバケンのわが祖国

Kobaken's My Fatherland

指揮とお話 小林 研一郎 Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

コンサートマスター 依田真宣 Masanobu Yoda, concertmaster

スメタナ: 連作交響詩『わが祖国』より

Bedřich Smetana: Excerpts from "Má Vlast"

第1曲: ヴィシェフラド(高い城) Vyšehrad (The High Castle)

第3曲: シャールカ Šárka

休憩 Intermission (約15分)

第4曲: ボヘミアの森と草原から From Bohemia's Woods and Fields

第2曲: ヴルタヴァ(モルダウ) Vltava (Moldau)

第75回

休日の
午後の
コンサート



2/4

2/4(日) 14:00 開演 東京オペラシティコンサートホール

Sun. February 4, 2018, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催: 公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団
 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
 Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
 Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

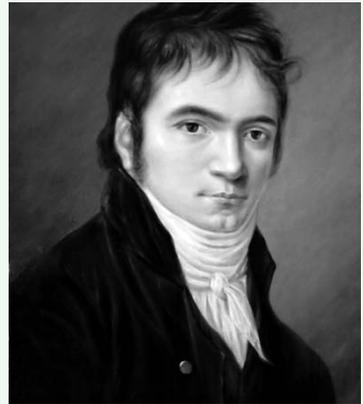
イラスト: ハラダチエ



Follow UP!

失われゆく聴覚と戦った偉大な作曲家

耳の病を患った作曲家といえば、ベートーヴェンの名が思い浮かびますが、スメタナの状況もかなり悲劇的。その発端は、幼少の頃に至近距離で火薬が爆発したことにあります。当時は衝撃で2日間耳が聞こえなくなったとのこと。そして18歳から耳が遠くなり、46歳からはまわりにも難聴が知られ、50歳の1874年には全く聞こえなくなりました。つまり彼は、国民的な人気を集めた『わが祖国』の演奏を耳にすることができなかったわけです。また1876年に書かれた弦楽四重奏曲第1番『わが生涯より』では、ヴァイオリンで「キーン」という高音が奏されます。これは失聴の始まりを告げた耳鳴りを表しており、聴くと痛ましい思いに駆られます。



ベートーヴェンも28歳ころから難聴に悩まされていたという

しかし一方で、このことが作曲に専念する時間をもたらしたのは、悲しいけれども1つの事実。『わが祖国』は、それゆえに生まれた名作といえなくもありません。実際彼は、同曲や2つの弦楽四重奏曲といった代表作、4つのオペラ(1つは未完)など、失聴後に少なからず作品を残しました。この実績もまたベートーヴェン同様であり、その精神力に感服させられます。

しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。近著に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。